

有道得財 和氣生財

レンゴー会長兼社長

大坪 清



「有道得財 和氣生財」。財を得るに道あり、氣を和して財を生め。これは私の座右の銘である。漢の時代、劉向が編さんした「説苑」にある言葉だ。また若い頃、中国に出張した際、ある街の市場でこの言葉が書かれた掛け軸を見つけた。

企業が経済活動を継続するには、経常的な利益を生み出す努力が必要である。そして、この利益を国家、公益に役立つように使わなくてはならない。良好な人間関係こそが財を生むという意味である。

この言葉は、住友第2代総理事・伊庭貞剛が言い続けた言葉「君子財を愛す、之を取るに道あり」に通じ、その住友の事業精神である、「信用を重んじ確実を旨とする」、

「浮利にはしり軽進すべからず」という理念に通じている。

経済活動の基本は、土地と労働資本をフルに使って財とサービスを作り出すことが大前提だ。企業がずっと存続し、従業員の生活を守るためには、財を生み続けなければならぬが、その財を生み出すための道とは何であろうか。基本的なことは、「すべては現場にある」ということだ。

当社の事業であれば、パッケージングにまつわるすべての課題を解決できるのは、唯一、人間の知恵である。それぞれの現場を熟知した従業員一人ひとりがイノベーションの主役となり、誰もが生き生きと働き、現場の真理を究めてこ

そ、本当の価値を持ったパッケージングの進化が生まれる。その現場とマネジメントをつなぐものが、「有道得財 和氣生財」といえるだろう。

折しも、昨年6月からコーポレートガバナンス・コード（企業統治指針）が施行され、企業のガバナンスに対する関心が高まっている。成長戦略の重要な柱と位置付けられているが、何よりも企業自身から自らの問題として、企業改革の契機にしようと走り出している。

新しいコードは、攻めのガバナンスといわれ稼ぐ力を取り戻す「経営改革と期待されている。技術力や現場力の高さに比べ、マネジメントに課題があり、それが収益力の低さにつながっているといわれる。

日本がコーポレートガバナンス・コードのお手本とした英国でも、いまだに企業の不祥事はなくない。どんなに立派な仕組みを整えても、要はそれを運用

する人しだいということだ。

そのコードの要諦は、透明性と対話に尽きる。中でも、すべてのステークホルダーとの対話が最も重要である。

武士道をはじめ、茶道や華道、柔道や剣道と、日本人は「道」という言葉が好きだ。経営道という人もいる。何事を極めるにも、道というものを考える。その本質を端的に言えば、矜持と惻隱の情といえようか。私の敬愛するアダム・スミス流に表現すれば、Morality（道徳）、Ethics（倫理）、Philosophy（哲学）、Sentiment（感情）、Sympathy（惻隱の情）となる。

和をもって貴しとなす。大和の国のわれわれは、今年こそぜひ、矜持と惻隱の情を持ちつつ、大きな和をもって経済再生を実現させたものである。

私の執務室に掲げられた「有道得財 和氣生財」の額を前に、新年の誓いを新たにしている。

